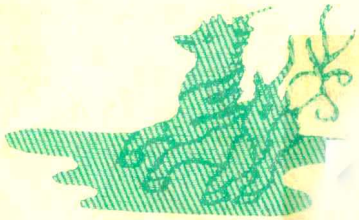


林田孝和著

異郷論

「王朝びとの心象」

桜楓社



林田 孝和 (はやした たかかず)

昭和16年 熊本県に生まれる。

昭和39年 国学院大学文学部卒業。

昭和44年 国学院大学大学院博士課程所定単位取得。

現 在 国学院大学栃木短期大学助教授。

国学院大学兼任講師。

著 書 『源氏物語の発想』(桜楓社・昭和55年)

『王朝びとの精神史』(桜楓社・昭和58年)

現 住 所 埼玉県春日部市豊町3-3-25

異郷論

王朝びとの心象

定価 一八〇〇円

昭和六十一年四月五日 印刷
昭和六十一年四月十日 発行

著 者 ©林田 孝和

発行者 及川 篤二

印刷所 シナノ印刷

株式会社 桜 楓 社

101 東京都千代田区猿樂町二一八一—三

TEL 〇三—二九五—八七七一
振替 東京 六一—一八〇二〇

Printed in Japan 検印省略
ISBN4-273-02089-0

造本には充分注意しておりますが、落丁・乱丁などございましたら、
発行所かお買上げの書店にておとりかえします。

異郷論

「王朝びとの心象」

林田孝和著

異郷論

王朝びとの心象

目

次



海獸葡萄鏡 國學院大學栃木短期大學藏

I 異郷意識の展開

異郷意識の始原

- 一 常世の語義 11

- 二 折口博士の異郷論と補陀洛渡海 14

- 三 常世からの来訪者 16

- 四 樂土昇天 17

王朝びとの河川観

——物語文学を中心にして——

- 一 王朝物語文学の開花 20

- 二 孤愁・悲嘆の場 22

- 三 河のほとりの怪異譚 25

- 四 入水譚の生成と帰結 29

- 五 水辺の祭場とへ水の女 35

六 浮舟物語と水の力 38

七 文学空間 40

叙景文学の発生……

——山岳信仰断章——

はじめに 44

一 自然崇拜 45

二 叙景文学発生の場 50

三 叙景歌の行く方 55

四 死出の山 63

五 異郷への憧憬 66

物語文学と伝説……

一 伝説の語義 72

二 伝説の生成——姥捨伝説を中心に—— 76

三 三輪山式神婚伝説と物語 82

四 入水伝説と入水譚の系譜 85

五 安積香山伝説とその影響 91

むすび 94

伊勢物語の宴席………

97

一 四季の循環 97

二 春の雪 98

三 観桜花・花の宴 101

四 聖婚の投影章段 105

古今集「伊勢歌」の背景………

108

はじめに 108

一 異郷の神を迎えて 110

二 成木責め 113

三 もものならぬ木 116

四 年頭の問答 119

五 豊饒祈願の祭儀 126

六 まつりと聖婚 131

II 源氏物語の精神史ノート

和歌から物語へ……………141

一 物語のクライマックス 141

二 歌物語の成立 142

源氏物語の作為と伝承……………147

——光源氏の色好みを中心にして——

一 折口説の展開——貴種流離譚と物の怪論—— 147

二 色好み論の可能性 150

源氏物語の絵……………155

——影・絵・形・人形をめぐる——

はじめに——影になった姫の実像—— 155

一 影と肖像画 157

二 薫の大君追慕 163

三 カタドルことの意味 165

四 男女共寝の絵姿 168

むすび 171

“思ひあがる” 美徳のかげに…………… 174

——源氏物語の巻頭の読み——

朱雀院のことば…………… 179

朱雀院の手紙…………… 184

紫の恋情発想ノート…………… 189

あとがき…………… 195

I

異郷意識の展開

異郷意識の始原

一 常世の語義

古来、異郷への憧憬の念はあつた。異郷を古く常世トコヨといった。常世とは、古代人が海の彼方に観想した永遠不変の原郷・理想郷で、「妣ははの国」(『古事記』上巻)ともいう。トコは恒常、永遠の意。ヨは寿命、生涯、時代、世界の意で、古義では齡、穀物の意もあつた。上代仮名遣いはすべて乙類であるから、甲類の夜の意は古くはなかったらしい。

常世は『万葉集』では、

吾妹子は常世の国に住みけらし
昔見しより変ヲ若ちましにけり

(卷四、六五〇)

君を待つ松浦の浦の嬢子等は、常世の国の天嬢子かも

(巻五、八六五)

……水の江の浦島の児が……海若の神の女に、邂逅に、い傍ぎ向ひあひとぶらひ、こと成りしかば、かき結び常世に至り、海若の神の宮の、内の重の妙なる殿に、携り二人入り居て、老もせず、死もせずして、永き世にありけるものを……

(巻九、一七四〇)

と詠まれるように、不老不死の国、恋の成就する豊饒の国であつた。

もっとも常世の国は「神仙秘区」(「垂仁紀」)、「到蓬萊山、歴親仙衆」(「雄略紀」)、「神仙堺」(「丹後国風土記」逸文)などと記されているように、中国の神仙思想の影響も濃い。しかし、神仙譚ふうに脚色される前の常世観は、

常世の神を祭らば、貧しき人は富を致し、老いたる人は還りて少ゆ

(「皇極紀」三年七月の条)

とあるように、富（豊饒）と寿（生命）をもたらす国という素朴なものであったようだ。したがって物成り豊かな常陸の国を「古の人、常世の国といへるは、蓋し疑ふらくは此の地ならむか」（『常陸国風土記』）と観想したり、

是の神風の伊勢国は、常世の浪の重波帰する国なり。

（『垂仁紀』二十五年三月の条）

と伊勢の国を讚美したりするようになる。^{（1）}

常世を理想郷とみる以外に、『古事記』天の石屋戸神話に、

天の石屋戸を開きてさし隠りましき。ここに高天の原皆暗く、葦原の中つ国悉に闇し。これに因りて、常夜往く。

とあるような絶対の闇、恐ろしい死の世界とする考えもあつたとみられる。

二 折口博士の異郷論と補陀洛渡海

日本文学研究の領域に異郷論、常世論を導入したのは、折口信夫博士であつた。折口博士の異郷論は明治四十五年の夏、志摩・大王ヶ崎の突端から海の彼方に「妣の国」をみられた実感から始まる。大正五年「アララギ」に発表された「異郷意識の進展」（『折口信夫全集』第二十巻、中央公論社）をかわきりに「妣の国へ・常世へ」（大正九年。「妣が国へ・常世へ——異郷意識の起伏」『古代研究』民俗学篇1、大岡山書店、昭和四年。全集第二巻）、「古代生活の研究——常世の国」（大正十四年。全集第二巻）、改稿を重ねられた「国文学の発生」（全集第一巻）、「日本文学の発生」（全集第七巻）を経て、その総決算である「民族史観における他界観念」（昭和二十七年。全集第十六巻）にいたる。この折口博士の常世論の展開の軌跡を、伊藤幹治氏は次のように整理される。⁽²⁾

(1) 闇の国（死の国）↓絶対の齢の国

(2) 常闇の国↓不死の国↓豊饒の国

〔国文学の発生〕四稿

〔国文学の発生〕三稿

(3) 常夜の国 (絶対の闇黒国) ↓ 常寿の国 ↓ 永遠の富みの国 ↓ 神仙界

(「大倭宮廷の叛業期」)

(4) 暗い国 ↓ 豊かな長寿の円満な常愛の国

(「ひめなすびとひめあそびと」)

(5) 常夜 ↓ 常齡 (永久の齡を用語例とする常世) ↓ 常愛 (不死にして愛の涸渇を経験する時なき

樂土)

(「民族史観における他界觀念」)

これを見てもわかるように折口博士の常世観は、古くは常闇の国、常夜の国とされていたのが、次第に醇化し、理想化されて、常住の年齢、永久の富、不変の恋愛の存在する淨土をみておられたことがわかる。常夜とみるには上代仮名遣いの問題がのこるが、要するに常世は、古代人の原郷であり、魂のおもむく異郷であったことに変わりない。天上に理想郷・天国の存在を観想する垂直思考をとってこられた柳田国男氏も、晩年、古人が海の彼方に常世の存在を信じたという折口説の水平思考を是認しておられる⁽³⁾。熊野の那智勝浦の補陀洛山寺、土佐国室戸津、熊本県玉名市などに認められる補陀洛渡海の習俗や、大阪の天王寺の日想觀往生といわれる入水信仰⁽⁵⁾も、衆人環視のなかで渡海上人や信者が、生きながらにして海上はるか彼方の觀音淨土をもとめて舟出したり、入水したりしたのであり、